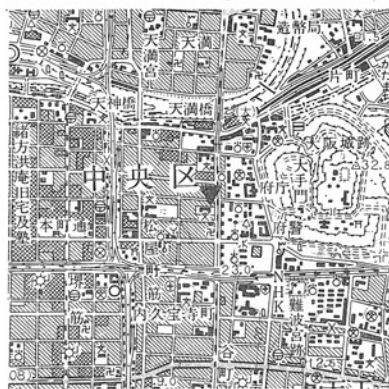


大阪・大坂城跡

- 1 所在地 大阪市中心区大手通二丁目
- 2 調査期間 一九九一年(平3)七月～一〇月
- 3 発掘機関 財大阪市文化財協会
- 4 調査担当者 植木 久・伊藤 純・大成可乃
- 5 遺跡の種類 宮殿跡、城郭・城下町跡
- 6 遺跡の年代 奈良時代～江戸時代
- 7 遺跡および木簡出土遺構の概要



(大阪東北部)

調査地は南から北へ延びる上町台地の北端部、標高一五mほどのところに位置している。当地は豊臣氏大坂城の惣構内であり、奈良時代においては難波宮域の北西隅付近と推定されている。調査では近世と古代の遺構を確認した。近世の遺構には穴蔵、土坑、柵などがあり古代の遺構は掘立柱建物、土坑、溝などがある。木簡は近世の土坑から出土した。この土坑からは唐

津焼の天目碗・向付、瀬戸焼の徳利、土師質の皿、焼塩壺、中国製の青磁を含め整理用コンテナ五箱分の陶磁器が出土した。また箸、黒漆塗りの椀などの木製品も出土した。

この土坑の年代は、出土遺物の年代観から、伊万里焼が出現する一六二〇年代以前と考えられる。したがってこの木簡もこの年代を下限に廃棄されたものと思われる。

8 木簡の釈文・内容

(1) ・「久貝忠」□×

・「久貝忠」×

(38)×23×3 039

木簡は下部が欠損しているため全文の内容については不明である。残存する上部の表裏には、「久貝忠」という名前が書かれている。この記載のみから人物を特定することには問題が残るが、大坂町奉



行「久貝忠左衛門正俊」の名は、遺物の年代観とも一致しており、注目される。この人物は『寛政重修諸家譜』によれば慶長一九年（二六二四）に大坂冬の陣に供奉し、それ以来活躍して、元和五年（二六一九）に大坂町奉行に任じられている。武蔵国、河内国八上郡・讃良郡・交野郡などに所領をもつが、当地とのつながりについては不明である。ただし寛永八～九年（二六三一～二六三二）のものと思われる『大坂御城並町中之図』の中には、天満橋のたもとに「久貝因幡守屋敷」とある。これは当時「久貝忠左衛門正俊」が当地付近にいたことを推測させる興味深い資料である。

今回見つかった木簡は、その形態から荷札として使用されたと考えられるものであり、どこからか久貝家の屋敷に運ばれてきた荷物につけられたものであったのかもしれない。その後不要になり、陶磁器などとともに廃棄されたのであろう。

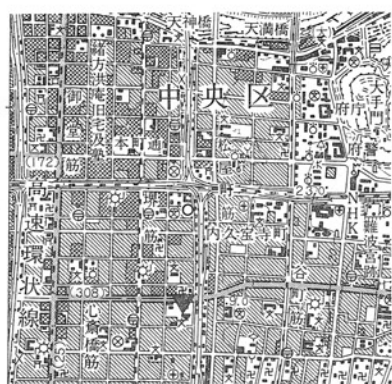
なお釈読については、大阪市文化財協会の豆谷浩之氏の協力を得た。

（植木 久・伊藤 純・大成可乃）

大阪・住友銅吹所跡 すみともどうふきしよ

- 1 所在地 大阪市中央区島之内一丁目
- 2 調査期間 一九九〇年（平二）五月～一九九一年五月
- 3 発掘機関 財大阪市文化財協会
- 4 調査担当者 鈴木秀典・清水ひかる・松尾信裕
- 5 遺跡の種類 銅精錬所跡・豪商住宅跡
- 6 遺跡の年代 一七～二〇世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

この遺跡には住友家が経営した銅の精錬所、住友長堀銅吹所（寛永一三年〔二六三六〕～明治九年〔一八七六〕）と住友本家住宅（元禄三年〔一六九〇〕～昭和二〇年〔一九四五〕）が存在した。発掘面積は約三六〇〇㎡で、銅精錬所・住宅関連の多くの遺構・遺物が出土した。



（大阪東北部）

木簡(1)は、平面五m×三mの長方形で、深さ一・二～一・四mの穴の底近くから出土した。この穴は形状